

モードは語る

中野 香織

完成品より「過程」こそ価値



「半・分解展」で惜しみなく分解された貴重な衣類

会で、おそらく世界で類を見ない。2年前に好評を博した展覧会をバージョンアップすべく、今回の展覧会において長谷川氏は、分解した服から型紙を起こして同じ型の服を製作し、来場者に試着してもらう体験型

展示にした。さらに、分解過程も動画で披露した。

来場者の多くは20~30代のミレニアルズであったが、反応を見ていて思ったのは、現代では完成品よりも、未完成品がなんらかの目標に向かって変化していく過程にこそ共感と支持を得られるのではないかということである。「半・分解展」の場合は、「服がパーツ（部品）に分解された状態」が目標であり、服として形をなしているものが徐々に解体され、部品という目標に向かっていく過程そのものに、最大のスリルと面白さがあった。

同じような感性は、たとえばクラウドファンディングで資金を集め、服やアクセサリーの制作から販売までの過程を、失敗も含めて公開する企業や事業が多くの支持を集めている幾多の事例においても見られる。また、書籍にしても、かつては完成まで情報公開がタブーとされたが、今では、赤文字だらけの校正段階を公開してフォロワーの意見を聞いたり、表紙の写真候補を公開して選んでもらったりして、多くの人を制作に巻き込んでしまう作家や編集者が人気を集める。

完璧な理想ならAIが提供してくれそうな未来が迫るなか、人間的で情緒的な奮闘の過程に、私たちはより高い価値を与えようとしているのかもしれない。（服飾史家）

「半・分解展」が大盛況

29歳のモデリスト、長谷川彰良氏が主宰する展覧会「半・分解展」が、東京・渋谷の会場で開かれ、6日間で1542人が訪れるという大盛況のうちに終了した。スポンサーなし、宣伝費ゼロで挑んだ一人の若者の果敢な挑戦に、多くの人々が共感し、SNS（交流サイト）でその感動を拡散し、応援した成果でもあった。

「半・分解展」とは、ガラスケースに貴重な歴史的資料として納められるような100年~200年前のビンテージ服にまさかのハサミを入れ、中の構造を分解して技法を解説しながら展示するという服飾史学の展覧